ダイナースクラブ
65周年
特別企画

DINERS CLUB
65th Years
in Japan

日本上陸65周年を迎えた
ダイナースクラブ。
それを記念して、
ダイナースクラブと同じ時を刻んできた
素敵なゲストにお話を伺います。
第一回はジャズピアニストの小曽根 真さんです。

人生を味わう、その贅沢

01

Makoto OZONE

ジャズピアニスト

小曽根 真

写真・秋田大輔　文・小野ゆかり

Photographs by Daisuke AKITA Text by Yukari ONO

人生を味わうとは？

65歳はただの通過点。これから先もずっと現役である時間を味わうことが贅沢なんだと思います

「実はね、若い頃からずっと愛用しているクレジットカードがダイナースクラブなんですよ。不安定な職業である音楽家だから、取得できるはずもないと思っていたのだけれど（笑）。当時住んでいたアメリカのデパートのカードでクレジット・ヒストリーを作ったことが功を奏したようで。おかげで、車のローン査定も一発（笑）。以来、長くおつきあいさせてもらっているんです」

〝道〟に邁進する者にはシンクロニシティ（意味のある偶然の一致）がその先を照らすとはよく言われることだが、新連載の第一回目のゲスト、ジャズピアニストの小曽根真氏が語ったこの些細なシンクロの話は、彼の半生を物語る序章のようなものだった。

ジャズに魅せられたのが2歳の時。

「父が友人たちとデキシーランドのバンドをやっていて、物心ついた頃には家の中で音楽が流れていました。魂の叫びのような音楽でしょう？　戦後日本が復興していく中で、父もそんな音楽に救われたうちの一人だったと思います。大人ばかりの練習にはなかなか連れて行ってもらえず、それが余計にジャズへの熱量になっていきました。3歳の時には曲を書いていましたからね（笑）」

ジャズの真髄へと導いてくれたのが父なら、ピアニストへの道を決定づけたのは、オスカー・ピーターソンとの偶然の出会い。それが実に12歳の時のことである。

「叔父が突然行けなくなったピーターソンのコンサートチケットをくれたんです。ピアノは女性っぽいイメージがあって気は進まなかったのですが、彼の音を聴いた瞬間、雷に打たれたように号泣。彼のように弾いてみたい……でも5歳の頃、ピアノレッスンの退屈さに挫折した7年分の遅れをどうやって取り戻そうかと焦りましたよ。でもそのくせ、世界デビューとまではいかないまでも、音楽で食べていく自信はあったんですけどね（笑）」

後に、首席で卒業することになるバークリー音楽大学への進学は、当初、第二のオスカー・ピーターソンになるためだけの〝過程〟だったという。

「猛練習のおかげで、その頃の僕は超絶技巧の弾き手になっていて、クラブで演奏すれば連日満員の喝采。でも、それだけ弾けるのならばピーターソンの真似でなく自身の音楽を作れと、先生をはじめとした様々な人に言われたんですよ。けれど僕はピーターソンになりたかっただけなので、卒業後は帰国し、恩師である北野タダオさんのビッグバンドを引き継ぐつもりでした。でもその計画が急変したのは、進路を聞いたゲイリー・バートンに『ビッグ・ミスティク！』と一蹴された時。『就労ビザもとってやる、うちのバンドに入れ』と……」

そんな小曽根氏の実力には、彼の卒業コンサートを聴いた大物プロデューサー、クインシー・ジョーンズからもデビューのオファーがやってきた。

「全米デビューを視野に入れた時、初めて誰かの真似ではなく自分の音楽でなければならないと思ったんですね。それを貫くため、クインシーから提示された10分の1の予算でCBS（現・ソニーミュージック）からアルバムを出すことに。でもあの頃、日に日に減っていく観客を見て焦る僕に、ゲーリー・バートンが言ったんですよ。『超絶技巧で弾ける若者にはいくらでも代わりがいる。けれど自分の音楽ならば、お客さんも一緒に成長してくれるんだ』と。あのアルバムから小曽根真の音楽は始まったと思いますね」

日本人初のCBS専属契約となったデビューアルバムは、ジャズでは異例の5万枚の売上を達成。以後、2003年グラミー賞ノミネート。チック・コリア、ブランフォード・マルサリスなどのトッププレイヤーとの共演は数知れず。小曽根氏は第二のオスカー・ピーターソンではなく、「ジャズ界の小曽根真」になった。

「演奏するだけでなく周りの音を聴くことを学び、クラシックなどジャンルを超えた音楽の魅力を知り、そして最愛の妻からは感謝することを教えられました。ジャズって〝コール・アンド・レスポンス（掛け合い）〟ですから、生き物なんです。弾き手の生きざまのすべてが出る。だから、もうすぐ65歳になりデビューして40年以上が経ちますが、その数字は僕にとっては節目ではなくて、ずっと通過点。いつまでも道の途中なんです。まだまだ拓いていく道があるのだと確信しています」

Makoto OZONE

1983年にバークリー音楽大学を首席で卒業後、米CBSと契約してデビュー。ゲイリー・バートン、チック・コリア、ブランフォード・マルサリスら世界的なミュージシャンと共演するほか、自身のビッグバンド「No Name Horses」を率いるなど、ジャズの最前線で活躍。また、クラシックの分野でも国内外のオーケストラと共演するなど、ジャンルを超えて幅広く活動している。

Information

ダイナースクラブ日本上陸65周年を記念して
小曽根真氏によるスペシャルコンサートの開催が決定。
詳細は本誌82ページと95ページをご覧ください。